

表紙解題

跡見花蹊筆《花鳥図画帖》*より「蠟梅山雀」

矢島 新

台北の故宮博物院に収蔵される跡見花蹊筆の画帖の一図である。この画帖が故宮博物院に収蔵されるに至った経緯については前号に泉文学部長が寄稿されているので、参照願いたい。

画帖には十二葉の花鳥画が貼り込まれており、各図は十二か月に対応すると考えられる。最終十二番目の本図は、「蠟梅山雀」と題されている。山雀（やまがら）は一年を通してみられる鳥で、この画帖においても一図目が「山雀」、八図目が「秋葵山雀」と3度目の登場であり、季節の表象ではない。本図は十二月を描いたものと考えられるが、季節は冬に花を咲かせる蠟梅によって示されている。

この画帖は花蹊が32歳の頃に描いたものである。花蹊は若き日に円山派に学んで写実技法を身に着けたが、その技が十分に発揮された作品である。蠟梅の枝は円山派のお家芸である付け立ての技法で描き、山雀は細かな毛描きを施している。山雀の頭頂部や花に丹念に塗られた青や黄色は鮮やかで、美しい。

花蹊は円山派に学んだあと南画の描法も身につけており、昨年11月に刊行された近代日本画の概説書（草薙奈津子著『日本画の歴史 近代編』中公新書）では、近代の南画家の一人として扱われている。円山派の緻密な写生画と、筆意ある激しい筆致を特色とする南画とは表現の方向が真逆というべきだが、花蹊は両者の長所をうまくブレンドした画風を確立したのである。草薙の著作は一般には南画的な傾向が強い画家と見なされていることを示しているが、この画帖のような初期の円山派風の写実画があまり知られていないことが、その一因かもしれない。初期の代表作というべきこの画帖が広く知られるようになれば、緻密な写生画家としての評価が高まるものと思われる。

* 故宮博物院の登録名称は「故画 清花蹊女史冊頁」である。